
光り

桜桃 ユメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光り

【Zコード】

N3687A

【作者名】

桜桃 ユメ

【あらすじ】

光りそんなあたたかなものなかなか届かないもの

一 月夜の少女

月が朧げに見える夜。

池の中央。一人の少女が静寂の中たたずんでいる。少女の悲しげな顔が水面に映る。夜も遅いせいか池の周りには、人っ子一人いない。辺りには、人工的な明かりはない。だから月以外彼女をてらすものはない……はずだった。しかし彼女の“立つて”いる所だけは、光っていた。そのせいか少女は幻想的に見える。そうまるで絵本から飛び出した妖精のようだ。その光は、ほたるのようだった。いやそれは、まさにほたるそのものだった。だがそれは、池から集まってきたものではなかつた。少女の手のひらからひとつまたひとつでできているものだつた。それの姿は、さながらマジシャンのようだつた。それは、ハトを次から次へとだすように軽やかに出てくる。少女が軽く手を閉じ、手に少し力をいれる。そして手をゆっくりと広げると……雪がゆっくりゆっくり落ちてくるように……そのほたるたちは、少女の手のひらから少女の足元へと落ちていく。一回で出せる量が決まっているのかしばらくすると……同じ動作を繰り返す。少女の足元に落ちていき、雪が積もるようになるとダンダンと重なっていく。そして一定量集まると……ほたるたちは、大きさと光りをまし少女の周囲を自由に飛び始める。まとまりのなかつたほたるたちは、次第に少女の体を覆うようにあつまりだす。まるで光のかべを少女の周りに作るかのように……あと少しで少女が光のかべで覆われそうとうとき……少女は、小さな声でそれでいてはつきりと発音して

「始まる。そして終わりにしよう」

といった。その瞬間……強力なプレシャーが辺りを覆いつくした。そして周りにあつた木々を押し倒して何かが少女に向かつて迫つてきた。それは、波動のようなものだつた。風が切り付けるかまいたちによく似ていた。ただ破壊力はその比ではなかつた。押した倒さ

れた木々が物語っていた。とうとう少女の体全体が光りに覆われた。その次の瞬間それは、少女を覆いつくした光に衝突した。そしてほたるたちが四方に飛び散った。するともうそこには、少女のすがたはなかつた……

一 転校生

キンコーンカンコーン

「おーいお前ら席に着け。かねなつたぞ！！」

と怒鳴りながら先生が入ってくる。がしかし生徒は、先生のことなど露知らずといった感じでおしゃべりに夢中である。しばらくたつてもおしゃべりはとまらなかつた。しびれを切らした先生は…

「転校生が着たんだ。早く座れ！！」

今度は、少し強い口調で言つ。生徒達はといつと転校生と聞いてざわめきがいそつ強くなつてゐる。

「転校生かどんなやつかな」

「きつとかわいい女の子じやないか」

などと期待満点の様子である。

「早く席に着け！！転校生に入つてもらえないだろ？が」
そろそろ先生の機嫌が悪くなつてきたので生徒達は、しぶしぶ各自の席に向かい座る。それを見て先生は機嫌を直し

「よし転校生を紹介しよう！！さあ火向光さんはいつ

と言つて出入口のほうを向きいつた。

生徒達は出入口にいつせいに目を向ける。

みんなが期待をよせているのだ。

まだ幼さが抜けきつていらない少女が入ってきた。

教室の一回は、一瞬時間が止まつたかのように少女に見入つてゐた。それは、少女がかわいいからというだけではなかつた。何か不思議と見せられている。そんな変わつた雰囲気が少女にはあつた。おずおずとした表情で少女は先生のとなりに移動した。そして前を向きょとんとした田で教室の生徒達を見やる。教室にいる生徒一同がまるで時間がとまつてゐるかのようにぼうつと自分をみてゐるからだ。

「まあ自己紹介して」

先生の声がまるで合図だつたかのように生徒達は動き出した。すると少女は恥ずかしいのか下を向いてしまつた。しばらく間があき覚悟ができたのか少女はいきなり話し始めた。

「えっと…私は、火向光です。よろしくお願ひします」
ちよこんと頭を下げる彼女は妙に愛らしかつた。

それが僕の光に対する最初の印象だつた。

彼女はすぐにクラスの人気者になりクラスになじんでいった。
彼女が転向してきてからの日々はあつという間に過ぎていった。
そんな平和な日々が続いていた。

いつまでも続く日常。

平和な日常。

そんな日常が当たり前だと思っていた。

でもいつまでも変わらないものではなかつた。

些細な出来事で壊れてしまうものだつた。

人は始めてそれが壊れて気づくものなのだろう。

僕がそうだったよう… 単調でつまらない日常。

先が見えていく繰り返される日常。

よく自分でそう言つていた。

でもいざそれが壊れてしまつとそんな日常でもよかつたとおもえる。
そうつまらなくともいい、日常が一番いい。そんな日々のなかでも
その人の生き方なりやり方なりでいくらでもかわる。楽しみだつて
みつけることができる。こうした考えが僕にもあれば…自分のすべて
を受け止められる自分が入れば、こんなことはおこらなかつたの
だろ…

三 得体の知れないもの

「危ない」

そんなふうに割つてはいったのがいけなかつた。平穏無事を祈つて遠くから見ていればよかつた。でも僕にはそんなことができなかつた。

考えるよりもはやく体が動き出していた。

その得体の知れないものの攻撃から光を守るために…。その得体の知れないというものは、真っ黒い塊だつた。人とか生き物という風には、感じなかつた。

というより生きているという気がしなかつた。

そいつらが出てきたとき辺りに少しづつ闇が広がってきた。まるでそいつらが引き連れてきたかのように。同時に冷たい空氣も漂つてきた。

最初は気のせいだと思った。

現実にこんなものが存在するなどありえない。僕のなかにある常識がそううたいかけていた。がそれが間違いだとすぐに思った。

実際にある威圧感・恐怖それらがすべてを物語つていた。

もはやおばけとか怪物とかいった類のものはレベルが違う。

冗談まじりのそんな話とは違う。

何かにつけて圧し掛かってくる重圧がそううたいかけていた。

そしてなによりもそいつらの引き連れてきた闇によつて辺りが暗闇にされた。

もはや疑う余地は残つてなかつた。

そしてそいつらは、あきらかな敵意を持つて光を狙つていた。目がどこにあるかわからないが光を取り囲むように集まっていく。光は、そいつらに囲まれても怖がらないようだつた。

僕の目がおかしくなったのか光の回りが本物の”光”に覆われてい

くようにみえた。

辺りに広がつた闇や冷たさは、その光に触れて消えていく。
温もり暖かさ何か心を揺さぶられるような光だ。
じわじわと黒い塊が光に向かつて近づいていく。
その中の一匹が光に向かつて飛び掛かった。

そのときだった。

僕は光に向かつてくる黒い物体にむかつて僕は飛び掛けたのは。
がしかし僕の体当たりは、むなしく空を切つた。
あつたはずの存在。

触れるはずだつた存在。

その存在は、彼女の回りにある光りに触れると同時に消えてしまつた。

なぜ消えたのだろうか僕にはわからなかつた。

「君……どうして」

彼女は、かなり啞然としていた。
途中で言葉は終わつてしまつた。
が続きははつきりと分かる。

ここにいるの……だ。

ここにいる理由。

それを聞かれると困るので僕は、先手をうつて話し掛けた
「あいつら一体なんなんだ??」

「えつ」

彼女は、さらに不意をつかれたようだつた。

「それは……危ない」

話に気を取られていた。

後ろから迫つてくるあの得体の知れないものに気が付かなかつた。
振り向いたらもう目と鼻の先にそいつはいた。

がそいつが僕に当たつたと思つた瞬間またそいつは、消えてしまつた。

彼女の回りに漂つてゐる光に焼き消されたようにな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3687a/>

光り

2011年1月1日14時34分発行